

日本旧石器学会
ニュースレター 第29号
NEWS LETTER No.29
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



インドにおける旧石器時代研究の動向

野口 淳 (NPO 法人南アジア文化遺産センター)

インドは、知られざる旧石器時代研究大国である。実際には、日本における認知度が低いという意味であるが、正確な数字を把握することは難しいが、アジア旧石器協会 (APA) を構成する4カ国を除くと、アジア諸国の中でもっとも多く旧石器時代研究者を擁するのはインドなのではないかと思われる。

インドの旧石器時代研究は英領時代に遡り150年以上の歴史をもつ。1863年、R. B. フート (Foote) は南インド・パラヴァラム (Pallavaram) でハンドアックスを発見、近隣の都市名にちなみ「マドラス文化」を提唱した¹⁾。2013～14年にかけて、150周年を記念する行事がインド各地で開催され、関連出版物も複数刊行されている (Paddayya and Deo eds. 2014 など)。記念切手発行を働きかける動きもあったが、残念ながら実現しなかった。そして近年では「南回りルート」による人類拡散—少なくとも原人と現代人の2回—の要衝として注目されている。しかし日本語での報告、紹介は乏しかったことから、編年、年代観をはじめとしたインドおよび南アジアの旧石器時代に関する理解は不十分なように見受けられる。そこで近年の調査研究動向を、以下に簡潔に紹介する。

学会・大学・調査機関等

全国レベルの組織としてインド先史学・第四紀学会 (Indian Society for Prehistoric and Quaternary Studies: ISPQS) がある。インド考古学会、インド文化学会との合同大会を毎年開催しているほか、機関誌 *Man and Environment* を年1回刊行している。

もっとも長い研究教育の歴史を有するのは、マハラシュトラ州デカン大学院大学 (Deccan College Post-graduate and Research Institute) である。H. D. サンカリヤ (Sankalia) 以降、多くの研究者を輩出している。また S. N. ラージャグル (Rajaguru: 2011 年

INQUA 名誉会員) の指導の下でジオアーケオロジーが積極的に導入されたことが特色であり、多くの成果に結実している (Wadia et al. eds. 1995)。グジャラート州マハラジャ・サヤジラオ大学 (Maharaja Sayajirao University of Baroda)、国立研究調査機関であるインド考古局 (Archaeological Survey of India: ASI) のいくつかの地方支局などが積極的な調査研究を進めているほか、各地の大学に研究者がいる。チャンディーガルのインド考古学・人類学研究協会 (Society for Archaeological and Anthropological Research)、タミル・ナドゥ州シャルマ文化遺産教育センター (Sharma Centre for Heritage Education) など NGO セクターの活動も特筆される。

前期旧石器時代

インド前期旧石器時代の主体は、ハンドアックスとクレーヴァーを伴うアシュレーアン石器群である。その年代については長らく短期編年 (0.5Ma～) が優勢であったが、カルナタカ州イサンプール (Isampur) の 1.2Ma (ESR)、タミル・ナドゥ州アッティランパカム (Attirampakkam) の 1.5Ma (¹⁰Be 年代と地磁気層序: Pappu et al. 2011) の報告を受け、長期編年 (1.5Ma～) でほぼ決着した。なお前期ソアニアンに対応するアシュレーアン以前の礫器文化 (マハーデヴァン: Mahadevan など) の多くは、より新しく位置づけられるかジオファクトとされている。ただしオールドワン段階での「アウト・オブ・アフリカ0」の可能性も引き続き主張されている。

中期旧石器時代

各種理化学年代測定の実用化により、インド・アシュレーアンの下限が後期更新世まで及ぶ可能性が指摘されてきた。現在のところマドゥヤ・プラデーシュ州ソン川流域の年代層序にもとづき、アシュレーアンがステージ 6/5 境界かそれ以降まで続くことが確

認されている (Haslam et al. 2011)。「インド後期アッシューレアン」はルヴァロア石核を含むモード3石器群と併存ないし共伴する。前述のアッティランパッカム遺跡ではこの時期の層位的な出土が確認されており、報告書の刊行が期待される (現在、作成中)。

アーンドラ・プラデーシュ州ジュワラプーラム (Jwalapuram) 遺跡群やラージャスターン州の諸遺跡では、アッシューレアン要素を伴わない中期旧石器時代石器群が～40kaまで継続することが確認されている。J. ブリンクホーン (Blinkhorn) らは、これらが早期に進出した現代人の所産であり、北アフリカ～アラビア半島のヌビアン石器群と共通すると主張している (Blinkhorn et al. 2014 など)。今後の調査の焦点の一つである。そのほか Chauhan et al. (2015) も参照されたい。

後期旧石器時代

幾何形細石器が25ka (^{14}C 年代)まで遡ることが早くから知られてきたにも関わらず、注目されるようになったのは最近である (Mellars 2006 など)。スリランカの化石人骨とあわせて、確実な現代人の起源は47～38kaまで遡る。S. ミシュラ (Mishra) らは、マドゥヤ・プラデーシュ州メタケリ (Mehtakheri) 下層 (55ka: OSL) を細石器の最古年代とするが、層序、年代の理解に難がある。また最近、オディシャ州の遺跡で新期トバ・タフ (YTT) 下位で細石器が出土したとの報道もあったが、研究者らの見解は否定的である。北西部諸州では12～10kaを遡る細石器はまだ確認されていない。なお細石器は更新世/完新世境界を越えて継続し、中・南インドでは農耕の伝播、金属器の受容後も狩猟採集民社会により使用され続けてきたことが知られている。

最近の主要な調査

現在、北西部パンジャブ州シワリク前縁丘陵地帯、ラージャスターン州・グジャラート州タール砂漠地帯、グジャラート州サウラシュートラ半島、マドゥヤ・プラデーシュ州ソル川流域、同ナルマダ川流域などで継続的な総合調査、発掘調査が実施されている。シワリク丘陵地帯では動物化石も伴う前期更新統シワリク層群の調査が行なわれている。タール砂漠およびサウラシュートラ半島では北アフリカ、アラビア半島との関係を追究するブリンクホーンらの調査が継続しており、中期旧石器時代石器群の年代測定の進捗が期待される。

このほか特筆すべき調査を挙げておく。仏印共同の

ラダック総合調査は標高3千m超の高冷地の完新世以降の人類適応を主眼とするものだが、旧石器時代まで遡り得る石器が採集されている。旧石器人類の環境適応能力と極地進出の理解に重要なデータが得られる可能性がある。南インド～スリランカ沿岸に分布する古砂丘 (Teri) では、細石器の分布が知られていたが、後期更新世まで遡る可能性があるとして調査が行なわれている。年代が明確になれば遺跡分布、海岸適応の問題など「沿岸特急: coastal express」仮説の検証に大きく貢献するだろう。さらに東南アジアとの交通路にあたる北東部諸州 (アッサム、メガラヤ、ナガランド) で、洞窟遺跡や開地遺跡の調査が進められている。ここも目が離せない。

おわりに

インドを中心とする南アジアは、ユーラシア大陸南部～オセアニアへの人類の移住・拡散を検討する上で重要な位置を占める (Chauhan et al. 2015, 野口 2014, 2015)。今後も、調査研究の動向に注目する必要がある。なお、さらに詳しい情報については Petraglia and Allchin (2007)、および Quaternary International 誌の特集号 (vols. 192, 258, 269) を参照されたい。

本稿は2012～14年度日本旧石器学会研究グループ「南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ」の活動成果の一部である。情報提供協力: P. Ajithprasad, K. Akhilesh, J. Blinkhorn, P. R. Chauhan, S. G. Deo, C. Gadekar, R. Korisetar, S. Mishra, T. Padhan, S. Pappu, T. Recezack, M. Singh

註

- 1) 今日マドラスはチェンナイと呼ばれるが、考古学文化名称としては引き続きマドラスが使用される。

引用・参考文献

- Blinkhorn, J. et al. 2013 Middle Palaeolithic occupation in the Thar Desert during the Upper Pleistocene. *Quaternary Science Review*, 77.
- Chauhan, P. R., S. Ozarkar and S. Kulkarni 2015 Genes, stone tools, and modern human dispersals in the center of the Old World. In Y. Kaifu et al. (eds.), *Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia*. Texas A&M Univ. Press.
- Haslam, M. 2011 Late Acheulean hominins at the Marine Isotope Stage 6/ 5e transition in north-central India. *Quaternary Research*, 75.

- Mellars, P. 2006 *Going East. Science*, 313.
- Paddayya, K. and S. G. Deo (eds.) 2014 *Recent Advances in Acheulian Culture Studies in India*. ISPQS.
- Pappu, S. et al. 2011 *Early Pleistocene presence of Acheulian Hominins in South India. Science*, 331.
- Petraglia, M. D. and B. Allchin (eds.) 2007 *The Evolution and History of Human Populations in South Asia*. Springer.
- Sankalia, H. D. 1974 *Prehistory and protohistory of India and Pakistan*. Deccan College.
- Wadia, S., R. Korisettar and V. S. Kale (eds.) 1996 *Quaternary environments and Geoarchaeology of India*. Geological Society of India, Memoir 32.
- 野口 淳 2014 「現代人は、いつ、どのようにして世界へ広がっていったのか—出アフリカ・南回りルートの探究—」『古代文化』第 65 巻 3 号、117-129 頁、(財) 古代学協会
- 野口 淳 2015 「南アジア・アラビアの後期旧石器化と新人拡散」『ホモ・サピエンスと旧人 3』、六一書房

APA 新執行体制について

前号のニュースレターで紹介されたように、昨年 11 月に韓国公州で第 7 回アジア旧石器協会 APA の年次大会が開催されました。これに合わせて、APA の執行会議が 11 月 14 日に開催されましたので、要点について報告いたします。

APA の執行体制は 1 期 2 年であり、今回の執行会議において次期 (2015 年 1 月 1 日～2016 年 12 月末) の執行体制が決定しました。現在の APA 執行体制は、加盟国であるロシア・中国・韓国・日本の国内旧石器学会 (および相当する学術団体) から推薦された 3 名 (副会長 1 人、執行委員 2 人) で構成され、別に会長を任期末の会議において選挙で決定しています。これまで会長は、ロシア・韓国・日本の順で選出されていますので、今回の会議では中国の Xing GAO 教授が新会長に選ばれました。小野 昭 前会長は、2014 年末で退任となりました。新しい執行体制は、以下の通りです。

会 長: Xing GAO 教授 (中国)
秘書長: Ying GUAN 博士 (中国)

- ロシア: Nikolay DROZDOV 教授 (副会長)、
Andrei KRIVOSHAPKIN 教授、
Konstantin PAVLENOK 博士 (以上執行委員)
- 中 国: Youping WANG 教授 (副会長)、
Shejiang WANG 教授、
Shengqian CHEN 教授 (以上執行委員)
- 韓 国: Jongyoon WOO 博士 (副会長)、
Heongjong LEE 教授、
Miyong HONG 博士 (以上執行委員)
- 日 本: 佐藤 宏之 (副会長)、
出穂 雅実 会員、
野口 淳 会員 (以上執行委員)

* 下線を引いた委員は各国の連絡担当

新体制の選出とともに、いくつかの課題について議論が行われました。まず次回大会から、これまで毎年開催していた大会を 2 年毎にすることが正式に認められました。そのため次回の APA 日本大会は、2016 年開催となります。また経年的な検討課題である APA 会員資格の拡大についても議論がなされました。個人での加盟資格については意見がまとまらなかったですが、日本からインド、韓国からモンゴルの参加希望について紹介があり、大会開催能力を有する国内規模の学術団体を設立し、それを単位とする (one country, one organization の原則) ならば加盟を検討することが了解されました。今後は APA 活動の拡大がテーマとなります。(佐藤宏之)

日本旧石器学会研究グループ 2014 年度活動報告

1. 沖縄更新世人類研究グループ

① 旧石器時代の具器文化に関する調査研究

昨年度報告した、沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の具器に関連する調査研究を継続的に実施した。日本旧石器学会第 12 回大会ならびに九州旧石器文化研究会第 40 回記念大会では、サキタリ洞出土具器のレプリカや出土品を展示し、多くの研究者からご意見をうかがうことができた。

② ベトナム・ホアビン文化に関する調査

東南アジアの旧石器～中石器文化として著名な、ホアビン文化に関する現地調査ならびに資料調査を実施した。ホアビン文化では、石灰岩山塊の洞穴内に淡水貝からなる大規模な貝層が形成され、大量の礫器類が伴出する。山岳と島嶼という違いはあるが、

沖縄の旧石器文化を考える上でも示唆に富む知見を得ることができた。

③人骨に関する調査研究

南城市サキタリ洞遺跡の調査区Ⅱでは、2014年度の調査において9,000年前以前の地層中から、一体分の個体骨格が検出された。この人骨は、右大腿骨の近位部を除く下肢骨および左手部分が失われているが、仰向けに横たわった状態で、各部位が交連した状態で検出された(写真1)。人骨の上位からは、径30センチ程度の石灰岩礫が4個検出されており、遺体の埋葬に伴って配置された可能性が考えられる。墓坑の掘り方や年代については、次年度以降精査していく予定である。この人骨の調査に関連して、旧石器時代から縄文時代(草創期・早期)の埋葬人骨の類例について予備的集成と検討を行った。



写真1 サキタリ洞遺跡出土の個体骨格

(左側が頭、手前が右腕、胸部・腹部の上位に礫が配置されている。)

④成果発表

●学会発表

山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・國木田大・大城逸朗「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の発掘調査(2009～2013年度)」日本考古学協会第80回総会(2014年5月)

山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・海部陽介・黒住耐二「沖縄の旧石器人と貝器文化—島に生きた旧石器人とその文化を探る」日本旧石器学会第12回講演・研究発表(2014年6月)

山崎真治「琉球列島の旧石器人とその文化」九州旧石器文化研究会第40回記念大会(2014年9月)

●論文等

山崎真治「人類史の『空白』を探る—沖縄県南城市サキタリ洞遺跡」『季刊考古学』127(2014年4月)

山崎真治「骨と貝が語る沖縄の旧石器時代」

『ミルシル』7(4) 国立科学博物館(2014年7月)
山崎真治「琉球列島の旧石器人とその文化—南からの視点」『九州旧石器』18(2014年9月)

山崎真治「旧石器時代から貝塚時代へ—起源論研究の現状とその行方—」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』: 新里貴之・高宮広土編『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』1六一書房(2014年4月)

山崎真治・藤田祐樹・片桐千亜紀・黒住耐二・海部陽介「沖縄県南城市サキタリ洞遺跡出土の後期更新世の海産貝類と人類との関わり」『Anthropological Science (Japanese Series)』122(2014年6月)

Fujita, M., Yamasaki, S., Sugawara, H., Eda, M. Body size reduction in wild boar (*Sus scrofa*) from the late Pleistocene Maehira Fissure Site in Okinawa-jima Island, Japan, with relevance to human arrival. *Quaternary International* xxx: 1-11.(2014)

(山崎真治)

2. 南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ

①南アジア旧石器時代遺跡データベースの整備

2014年度はインド南部を中心に既公表データの収集、整理を進めた。またデータベースの整備を開始した。

②パキスタン、ソアン川流域遺跡群の踏査、年代測定試料採取、既往調査採集資料調査(2014年8月)

学史上、最初に記載されたソアン第1地点およびイギリス隊が調査したリワート遺跡に隣接する地区(バーリア・タウン)を中心に、露頭における層序・堆積の確認とOSL年代測定試料の採取、および周辺における既往調査採集資料の写真撮影・3D計測を、ハザーラ大学考古学研究室およびM.サーリム、カイデ・イ・アザム大学元教授と共同で実施した。なお採集試料の年代測定と、3D計測データの解析は日本国内で継続的に実施している。

③石器群の画像・3D計測データ・アーカイブの整備

東海大学近藤研究室のご協力により、同大学所蔵丸山コレクションの前期～中期旧石器時代資料の高精細デジタル画像作成、3D計測モデルの作成を継続した。

④成果の普及・公開

1) 学会・研究会等発表

● 日本西アジア考古学会第 19 回大会 (2014 年 6 月 14 ~ 15 日: 神奈川): 野口 淳・千葉 史・横山 真・Q.H. マッラ・G.M. ヴィーサル・下岡順直・N. シェイフ・近藤英夫「インダス川中・下流域~タール砂漠西部における先史時代石器群の様相: 3D 計測にもとづくコア・リダクションの検討」

● 21st Conference of European Association for South Asian Archaeology and Art History (2014 年 6 月 30 日~7 月 5 日: スウェーデン・ストックホルム現代美術館): a. A. Noguchi, Q. H. Mallah, F. Chiba, S. Yokoyama, Y. Shitaoka, G. M. Veesar, N. Shaikh, H. Kondo 'Techno-morphological Assessment of the Lithic Assemblage and the Blade Core Reduction Sequence of Veesar Valley, at the Western Fringe of the Thar Desert, Northern Sindh, Pakistan.' (口頭発表), b. Q. H. Mallah, A. Noguchi, F. Chiba, S. Yokoyama 'The first discovery of Palaeolithic blade-flake industry in Chagai Hills, Chagai district, northwestern Balochistan, Pakistan' (ポスター発表)

● International Seminar on 75th Anniversary of Archaeology and Language at Deccan College Post-Graduate & Research Institute, with Joint Annual Conference of Indian Archaeological Society, Indian Society for Prehistoric and Quaternary Studies, and Indian History and Culture Society (2014 年 10 月 6 ~ 9 日: インド・デカン大学院大学): A. Noguchi 'Technological background and development of the Harappan lithic production system in the Indus Valley'

● 7th annual meeting of Asian Palaeolithic Association (2014 年 11 月 12 ~ 16 日: 韓国・公州大学): A. Noguchi, M. Zahir, Y. Shitaoka, M. Salim 'Soan revisited: re-documentation and reevaluation of the Soan Valley sites by the Pakistan-Japan Archaeological Mission'

● 第 22 回西アジア発掘調査報告会 (2015 年 3 月 21 ~ 22 日: 東京): 野口 淳・下岡順直・M. ザヒル・M. サリーム「南アジア人類史の解明を目指してーパキスタン・ソアン川流域旧石器時代遺跡群調査 (2014 年) ー」

2) 刊行物等

・野口 淳「PJAM/ パキスタンー日本考古学共同調査 2013 ヴィーサル・ヴァレー遺跡群資料調査、ハザーラ大学訪問」『インド考古研究』

35:62-67 頁、インド考古研究会

・野口 淳「現代人は、いつ、どのようにして世界へ広がっていったのかー出アフリカ・南回りルートの探究ー」『古代文化』第 65 巻 3 号、117-129 頁、(財) 古代学協会

・野口 淳「南アジア・アラビアの後期旧石器化と新人拡散」『ホモ・サピエンスと旧人 3』、六一書房

・野口 淳・下岡順直・M. ザヒル・M. サリーム「南アジア人類史の解明を目指してーパキスタン・ソアン川流域旧石器時代遺跡群調査 (2014 年) ー」『第 22 回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会・古代オリエント博物館

⑤今後の方針

今年度で 2012 年度から 3 ヶ年の期間が過ぎた。その間に蓄積した成果について公表の準備を進めるとともに、パキスタンにおける発掘調査、インドほかにおける資料調査を今後も継続して実施する予定である。また 2015 年 7 月 27 日~8 月 2 日に開催される INQUA 第 19 回大会において、M. マデラ (スペイン)、A. バルボ (スペイン)、J. ブリンクホーンら共同で、野口、下岡がコンヴィーナーとして、"Human dynamics in hot desert" セッション (H14) を開催する予定である。(野口 淳)

南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ

2014 年度メンバー: 野口 淳 (代表者) 下岡順直、横山 真、藤波啓容 (以上、分担者)、千葉 史、近藤英夫 (以上、協力者)

国際第四紀学連合 第 19 回名古屋大会 (2015.7.27-8.2) について

19 回大会は、名古屋国際会議場で 2015 年 7 月 27 日から 8 月 2 日までの会期で開催されます。国際第四紀学連合 (International Union for Quaternary Research: INQUA) が 4 年ごとに開催する会議であり、1928 年の第 1 回から 19 回目を迎え、第四紀学分野で最も歴史のある国際会議です。日本での開催は今回が初めてであり、この度の日本開催では、世界のトップレベルの研究者が一堂に会し、最新の研究成果について討論や発表が行われ、第四紀学の発展とその応用展開が期待されます。

大会の報告は全て公募のセッションによって行われます。過般の公募の結果、考古学関係は INQUA



国際第四紀学連合 第19回名古屋大会 ロゴ
 Commission HaBCOM (Humans and the Biosphere Commission) が中心で、34のセッションが立ち上がっています。そのうち3分の1弱は日本の研究者がコンビーナーとなっており、日本の研究を世界に発信する意気込みが感じられます。報告は各セッションに登録し口頭ないしポスターで発表が行われます。各セッションは10件～数十件の報告からなり、1月8日の締め切り段階で総数2500件以上の研究報告の申請がありました。

19回大会では、「第四紀学からみた気候変動・自然災害・文明」をメインテーマに、自然災害軽減のための第四紀研究、気候・海水準・環境変動予測高度化のための過去の変動の理解と定量化、人類と環境の動的相互作用の解明、第四紀層序学・年代学のための新しい技術と成果の統合を主要題目として、研究発表と討論が行われることとなっており、その成果は、第四紀学の発展に大きく資するものと期待されます。

・**主要題目**：自然災害軽減のための第四紀研究、気候・海水準・環境変動予測高度化のための過去の変動の理解と定量化、人類と環境の動的相互作用の解明、第四紀層序学・年代学のための新しい技術と成果の統合。

・**会議使用言語**：英語（同時通訳：なし）

・**会議プロシーディングス**

これまでの通例に合わせて、大会終了後に国際第四紀学連合が発行している刊行物（Quaternary International）の特集号として刊行する予定。

・**展示内容**

学術展示：研究機関・研究プロジェクト紹介

企業展示：書籍、分析機器、分析・解析企業

ポスターセッションの締め切りは5月11日迄延期されましたので、研究報告をすることは間に合いません。参加登録は通常登録締め切り6月30日（登録料75,000円）ですので、大会への参加の申し込みもまだできます。また「会議前」、「会議期間中日帰り」、

「会議後」の各巡検は充実しています。皆様の積極的な参加を期待申し上げます。詳細は日本第四紀学会ホームページ (<http://inqua2015.jp>) をご覧ください。なお、申し込み手続きの方法を日本旧石器学会のホームページ (<http://palaeolithic.jp>) にて解説していますので、こちらをご覧ください。

（国際第四紀学連合 第19回名古屋大会

組織委員会委員：小野 昭）

**岩宿フォーラム 2014 シンポジウム
 石器の変遷と時代の変革—旧石器から縄文石器へ—
 開催報告**

2014年11月1日（土）・2日（日）に群馬県みどり市笠懸公民館1階交流ホールにおいて、第23回岩宿文化賞（学生部門）授賞式及び受賞者フォーラムと岩宿フォーラム／シンポジウムが開催された。今回のシンポジウムは「石器の変遷と時代の変革」と題して、関東地方の縄文時代草創期の石器群の様相を通して、旧石器時代から縄文時代への移行期における石器の変遷について議論を行う試みであった。

まず、芹澤清八氏による北関東地方出土の石斧を中心に縄文時代草創期の石器の研究に関する基調講演が行われた後に、基調報告1として、筆者（阿久澤）により利根川以東の関東地方（群馬県・栃木県・茨城県・千葉県）、比田井民子氏により多摩丘陵地域、三瓶裕司氏により神奈川県内における縄文時代草創期の石器群の様相に関する報告がなされた。

続く基調報告2では、縄文時代草創期石器群の主要な器種のうち、刺突具に関する報告がなされた。まず尖頭器に関して、神子柴遺跡に代表される大型の尖頭器については島立 桂氏により、細身である本ノ木型尖頭器と小型で薄い木葉形薄型尖頭器については橋本勝雄氏により報告がなされた。報告中で橋本氏は関東地方の縄文時代草創期の石器群の編年についても触れ、さらに理解を深める形となった。さらに、有茎尖頭器について及川 稔氏により、石鏃について大工原 豊氏により報告がなされた。最後に、橋詰 潤氏によりナイフ形石器・尖頭器・有茎尖頭器・石鏃の欠損状態から、各刺突具の使用方法を推定し、それに縄文時代草創期の石器編年を加味することで刺突具の使用方法の変遷を想定した。

そして基調報告3として、縄文時代草創期のもう一つの主要な器種である石斧について報告がなされた。神子柴型石斧について須藤隆司氏により報告がな

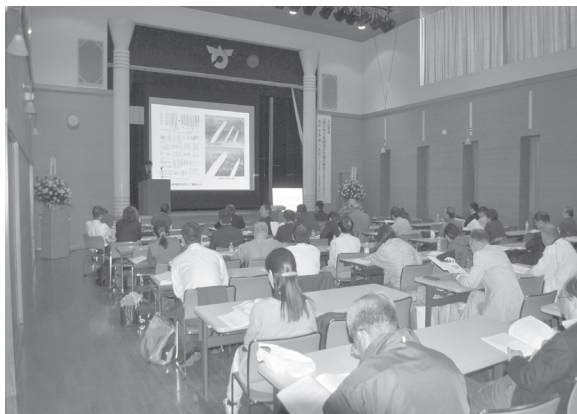


写真2 岩宿フォーラム会場風景

れ、後続して出現する局部磨製石斧（礫斧）について、萩谷千明氏により報告がなされた。

パネルディスカッションでは、小菅将夫氏・芹澤清八氏の司会によって進められ、黒色頁岩・硬質頁岩等主要な石器石材の地域性と細石刃石器群との関係、尖頭器製作に関する専門集団の存在の可能性、さらには旧石器時代から縄文時代へと移行していく中で、生活様式の変化により石器の機能が分化した結果として器種も分化したことなど、縄文時代草創期の石器に関して活発な意見交換がなされた。

(阿久澤 智和)

2015年度日本旧石器学会 総会・研究発表・シンポジウム のプログラムについて

2015年6月20日(土)・21日(日)に東北大学片平キャンパスさくらホール(宮城県仙台市片平2-1-1)におきまして、下記のとおり、日本旧石器学会総会、研究発表、シンポジウムを開催いたします。シンポジウムは、『更新世末の東北日本における環境変動と人類活動』と題して実施いたします。更新世末には、東北日本においても細石刃石器群や神子柴石器群など複数の石器群がめまぐるしく展開します。これは、環境変動を背景として周辺地域との影響関係(集団の拡散や技術の伝播)によるものと推測されます。そこで、本シンポジウムでは、環境変化や周辺地域の石器群にも目配りしつつ、更新世末の東北日本における石器や人々の動き、石器群の変化について議論したいと考えております。また、研究発表、ポスターセッションは、地域、時代ともに多岐にわたり、多様な内容となっております。ふるってご参加いただきますよう、よろしくお願いたします。

(芝 康次郎)

2015年6月20日(土)

- 総会 (13:00-14:20)
- 研究発表 (14:30-16:40)
 - ・海部陽介・張鈞翔・高井正成・河野礼子・松浦秀治
「台湾沖で発見された原人の下顎骨化石」
 - ・内藤裕一・Dorothee G. Drucker・Christoph Wising
・力石嘉人・大河内直彦・Patric Semal・Herve Bocherens「骨コラーゲン構成アミノ酸の窒素同位体比からみた Spy 洞窟出土ネアンデルタール人の生態的地位」
 - ・野口 淳・横山 真・千葉 史「後期旧石器時代初頭石斧の3次元形態分析—東京都武蔵台遺跡出土資料について—」
 - ・高倉 純「細石刃」剥離技術をどのように定義すべきか」
 - ・大塚宜明・上峯篤史・金成太郎・栗本政志「滋賀県大津市真野遺跡出土の細石刃石器群関連資料について」
 - ・橋詰 潤「環太平洋地域における有茎尖頭器研究について」

○ シンポジウム『更新世末の東北日本における環境変動と人類活動』(16:50-17:10)

- ・研究企画委員会「趣旨説明」
- 懇親会 (18:00～20:00) 片平キャンパス内レストラン萩(片平キャンパス食堂)
<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/katahira/areaa.html>

2015年6月21日(日)

○ シンポジウム『更新世末の東北日本における環境変動と人類活動』(9:00-12:15)

- ・吉川昌伸「更新世末から完新世初頭における東北日本の環境」
- ・佐久間光平・川口 潤「石器群の種類と年代・東北地方」
- ・赤井文人「石器群の種類と年代・北海道地方」
- ・仲田大人「石器群の種類と年代・関東地方」
- ・加藤 学「石器群の種類と年代・中部地方」
- ・沢田 敦「遺跡構造」

<ランチタイム(12:15-13:45)>

- ポスターセッション・コアタイム (12:45-13:45)
 - ・鹿又喜隆「長崎県福井洞穴の細石刃製作技術と石器編年」
 - ・越知睦和・沖野 誠・平ノ内武史「別府湾沿岸地域における旧石器時代の様相と編年的予察」

- ・熊谷亮介「石器横断面の分析手法に関する問題提起と改案—山形県の後期旧石器時代資料の分析から—」
 - ・山岡拓也「台形様石器の投射・刺突実験」
 - ・杉原保幸・高橋 康・牧野州明「長野県木崎湖畔小丸山ロームの生成時期とその「石器」群について」
 - ・中村由克「東日本における緑色凝灰岩製石斧を持つ遺跡群」
 - ・村椿篤史・熊谷亮介「山形県高倉山遺跡における遺跡形成過程の検討」
 - ・及川 穰・隅田祥光・稲田陽介・池谷信之・亀井淳志「島根県隠岐諸島島後における黒曜石原産地の踏査報告」
 - ・亀井淳志・角縁 進・隅田祥光・芝 康次郎・及川 穰・一本尚之・船井向洋・越知睦和・稲田陽介・腰岳黒曜石原産地研究グループ「佐賀県伊万里市腰岳黒曜石原産地の分布と元素分析結果」
 - ・岩瀬 彬・森先一貴・出穂雅実・米田 寛・廣松滉一「岩手県大渡Ⅱ遺跡の後期旧石器時代資料を対象とした石器使用痕分析（予報）」
 - ・黒田篤史・菊池強一・小向裕明・武田良夫・佐川正敏「金取遺跡の斧形石器をAPA KOREAで展示—大型重量石器に対する海外研究者のコメント—」
 - ・門脇誠二「ムトングウェ遺跡における背付き細石器技術：アフリカMSA/LSA移行期における技術変化の考察」
- パネルディスカッション・コメント (13:45-15:15)
- 講 評 (15:15-15:30)
- 閉 会 (15:30)

会場案内：東北大学片平キャンパス

片平さくらホール

〒980-8577 仙台市青葉区片平二丁目1-1

JR 東日本仙台駅西口下車徒歩約15分

<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/katahira/>

* 駐車場はありませんので、車での来場はご遠慮ください。

宿 泊：各自で手配下さい。

参加申込：同封の葉書に必要事項を記入の上、6月7日(投函)までに事務局までお申し込み下さい。ま

た、やむを得ず欠席される場合は、会則第5条により、欠席の委任状を含め全会員の5分の1以上の出席をもって総会が成立しますので、同葉書下段に記載された委任状に記入、押印のうえ投函願います。

お し ら せ

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則として前納とさせていただきます。同封の払込取扱票を用いて、2015年度分の会費の納入をお願いいたします。また2014年度以前の会費を未納の方々につきましては、未納分を合わせて納入いただくよう、お願いいたします。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号 00180 - 8 - 408055 です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

なお、転居された方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載していただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

メーリングリストへの登録について

既に何度かご連絡しているように2013年度後半からメーリングリストを運営しております。これは、学会からの連絡手段として利用するとともに、学会内での情報交換の手段として利用するために設けたものです。現在メーリングリストに登録されている方は75名です（現在の旧石器学会会員数はおよそ240名です）。

まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストの登録をお願いいたします。登録するメールアドレスを総務委員の山岡のメールアドレス(takuyayamaoka@yahoo.co.jp)までお知らせください。強制するものではありませんが、ご協力をお願いいたします。

日本旧石器学会ニュースレター 第29号

2015年5月1日発行

編 集：日本旧石器学会ニュースレター委員会
高倉 純・氏家敏之・笹原芳郎・野口 淳・藤野次史
発 行：日本旧石器学会

事務局：〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

静岡大学 人文学部社会学科 山岡拓也 研究室

E-mail jpra_2003@ay.em-net.ne.jp

HP <http://palaolithic.jp/index.htm>